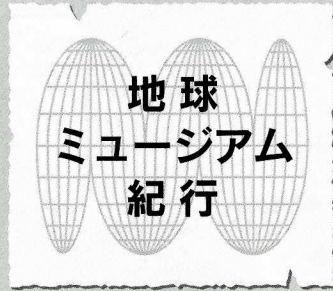


遺跡という名のミュージアム

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)

本館文化資源研究センター



寺院・廟墓・史跡 / インド

わたしが思いやっていたのは、プームのなかで全国各地につくられた日本の博物館、美術館のことである。洒落た外観の、しかしせいせい五〇年も経てば建て替えられるであろう建物のなかに、急ごしらえで集められた文化財や美術品の数々。それらはたしかにありがたいのだが、一方で、ただ見に行くだけでは不十分で、何かを学ばなければならぬ、などといわれたら、気が重くなって二の足を踏むのが人情というものだろう。

散歩ついでに、ただ行って帰るだけという、もっと

インドのおもだった都市には、どこも立派な博物館、美術館がある。

たとえば、首都ニューデリーには国立の博物館、近代美術館、それに工芸美術館、またガンジーやネルーの記念館をはじめ、大小さまざまな博物館や記念館があり、それぞれの展示内容は、一定以上の高いレベルを誇っている。けれども、インドの都市には、そうしたミュージアム以外に、いたるところにヒンズー教、イスラム教の古い寺院やかつての王の廟墓^{びよぼ}、あるいは史跡がある。これもニューデリーの例を挙げれば、いずれも有名なジャーマ・マスジッド、クトゥブ・ミナール、フマユン廟、レッド・フォートをはじめ、市内のあちこちに、見るからに由緒ありげで、歴史の風雪をしのばせる遺跡が散在している。そして、それらはどれも、散歩やハイキング、クリケット、はたまたデートを楽しむ若い恋人たちや家族連れに親しまれている。

おそらく、彼らは、日々の暮らしのなかでくつろぎや安らぎを求めて、何度もそうした遺跡を訪ねているに違いない。単なる癒しが目的であっても、繰り返し足を運ぶことで、いつしかごく自然に、そこに堆積している歴史のオーラに触れているのではないかと。むりやり詰め込んだ知識とは違って、そうした経験は一生忘れることがないだろう。

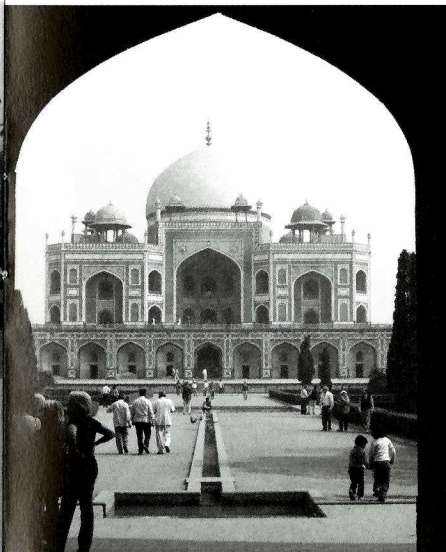
いしかえると、街なかにあるこれらの寺院や遺跡は、ミュージアムとこそ名乗っていないが、事実上のミュージアムとしての役割を果たしているのだ。むしろインドの風景のなかになじみ、人びとの日々の生活に溶け込んでいて、妙なお仕着せ臭さがない分だけ、いわゆる博物館、美術館よりもはるかに効果的にその機能を果たしている面があるかもしれない。

敷居の低いミュージアムのあり方もあっていいのではないか。

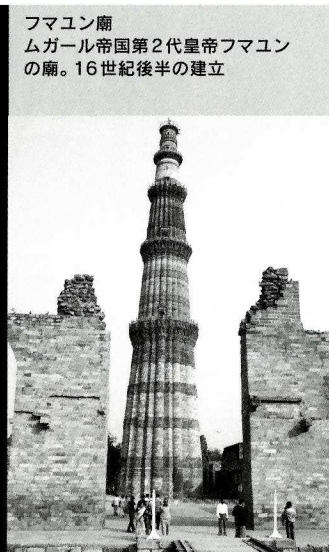
それにしても、目覚ましい発展ぶりが伝えられるインド経済。この先、経済成長を成し遂げたインドにも、かつての日本と同じようにミュージアム・プームというのがやってくるのだろうか。そのとき人びとはどんな反応を見せるのだろうか。少々気になるところである。



ジャンタル・マンタル
18世紀前半に造られた天文台



フマユン廟
ムガル帝国第2代皇帝フマユンの廟。16世紀後半の建立



国立近代美術館

クトゥブ・ミナール
イスラム勢力によるインド支配を象徴する塔。
13世紀に造営が始まり、15世紀後半に完成した